2013 年 5 月 30 日・「週刊きたかみ」では

『終わりなき悲しみ――戦争孤児と震災被害者の類似性』

金田茉莉著コールサック社

戦時中、宮城県に縁故疎開し、東京に帰った日、前日の３月 10 日の大空襲で家族を失い、親を捜し歩いた金田茉莉氏は「終わりなき悲しみ―戦争孤児と震災被害者の類似性」（コールサック社）を発刊した。9 歳の時に目撃し、孤児になった東京大空襲を想起させる大震災と津波、炎上する街。巡ったのは、震災孤児に対しての思いだった〈戦争によって孤児を強いられた多くの子供たちの過酷な人生、冷酷に散った幼い命が、そのまま震災・津波に重なる。筆者は重い問いを、突きつける。

「原発事故と戦争」と「民間・戦争犠牲者」の２つのテーマに分類。前者は「東日本大震災と原発事故」「原発事故と戦争の酷似」「東京大空襲」「戦争孤児」の 4 章で、後者は「空襲死者の実態」「追悼碑を求めて」「空襲孤児の思い」「補償を求めて」「置き去りにされた民」の 5 章構成。

自身の体験から、震災孤児や震災家族が戦災孤児と同じ状況に追い込まれる危惧を抱き、「震災孤児の救済を求める訴え」を書き、両議院会館を回って、議員に配布した。原発についても当局のあり方、反原発者の排除、子供の内部被爆、秘密主義などについて冷静に分析し、論難する。さらに人災、神話、想定外、情報隠しと証拠隠滅などなど、多項目にわたって原発事故と戦争の類似を指摘し、「犠牲のシステム」を維持する国家と行政から、「人間を生かすシステム」に行き着く変更方法を考察している。

平易な文章で、多様な問題点を上げた氏。後半の「民間・戦争犠牲者」では、現実との対峙による、苦汁をなめた体験からの実践論でもあり、「置き去りにされた民」として追い込まれないための論にもなっている。

「あとがき」にこうある。「空襲死者はその後、どう扱われ、処理されたのか」「国策として行われた学童疎開で、孤児になった子の、国の孤児対策はどうだったか」を調べたかった。「過去の問題ではなく、現在、未来に繋がっていく問題でもある」とする著者。この意思が、津波・原発被害者の心に寄り添い、幻想でない現実を弾劾し、次への行動も示唆する。監修は浅見洋子氏。

金田氏は「母にささげる鎮魂記」や「夜空のお星さま」に加え「焼け跡の子どもたち」（共著）、「平和のひろばを求めて」（共著）、「東京大空襲と戦争孤児」などの著書がある。

と紹介されています。